

中国の英語教育における到達目標と 学習ストラテジーの育成

——英語統一試験と英語課程基準の果たす役割——

岡 野 恵

1. はじめに

アジア圏近隣諸国の中で、中国はめざましい経済発展を見せている。その経済発展を支える要因の一つになっているのが中国人の英語力である。しかし、中国が外国語として英語教育に力を注ぐようになったのは、それほど古いことではない。中国における英語教育は中華人民共和国設立後の1950年代に始まったものの、当時外国語教育の主流はロシア語であり、その後、1978年の改革開放政策以来、1985年から1990年にかけては日本語教育が盛んに行われていた。当時は数々の大学に日本語学科が設置され、日本語を第一外国語として学ぶ学生が4割を超えていたほどである¹⁾。しかし、経済発展のために必要度の高い外国語は日本語ではなく、英語であるという認識のもと、1970年代以降は中等教育課程における外国語教育は英語が主流になった。

一方、日本では戦後、1947年には教育基本法、学校教育法が公布され、新制中学校が発足すると義務教育で英語が導入された。中国よりも20年以上前に英語が外国語教育の主流になっていたのである。しかし、その成果は評価に値するものとはいえず、1974年には、英語学習の目的をめぐる一大論争が巻き起こっていた。それは、英語は一部のエリートが高度な実際的能力を身につければ良いという自民党平泉渉のいわゆる実用英語論と、それに

昇一による教養としての英語論というべき二つの意見の論争であるが、その論点である英語学習の目的は 30 年を経た 2016 年の現在においても明確なものではない。

日本よりも遅く主流となった中国の英語教育が大きく成果を上げている理由の中で、日本との相違点として挙げられる主なものは、「教育制度や教育を取り巻く環境、学生の学習目的や意欲、学習時間」（宮内 2005, 尾関 2006, 新保 2011, 小池 2013）である。教育制度面では中国では 2003 年から小学校 3 年からの英語教育が必修化され、北京や上海等の大都市部では小学校 1 年から行われている。中国の英語教育は、『英語課程基準』（学習指導要領）で示された一貫したカリキュラムで、高等学校までの到達目標が CAN-DO 方式で示されている。西蔭・岡野・平石（2015）で論じられたように教科書の作成にも独自性があり、欧米文化を学びながら、中学 3 年までには中国文化を英語で発信することができるという目標に到達するよう、緩やかな流れができています。

さらに選ばれた学生が進学する大学でも、専攻分野に関わりなく、英語は重要視されている。全国で統一された英語の試験 College English Test (CET) 4 級に合格しなければ、学位を取得できないのである²⁾。またそれとは別に英語専攻の学生には Test for English Majors (TEM) という統一試験が課せられている。

英語が将来の成功のために必須であるという中国人の意識と小学校から高校までの一貫したカリキュラムが連携し、大学卒業という出口に設けられた英語統一試験へ繋がっていく。その間、英語の到達目標を達成するため、『英語課程基準』では、「言語技能」、「言語知識」、「感情や態度」、「学習ストラテジー」及び「文化意識」の 5 つの方面から目標が設定されている。

本稿においては、最初に CET4 級と TEM6 級の内容を見ることで、中国国家が求め、大学生自身が目指す英語力とはどういうものかを確認することを 1 つの目的とする。そして、『英語課程基準』に沿いながら、中国人学生に形成される学習目標、学習観、学習ストラテジーが相互にどのように関連しているのか明らかにすることをもう 1 つの目的とする。その際、『英語課程基準』において明示されているメタ認知能力の涵養に注目し、日本の英語

教育の参考になる部分を探求する。

2. CET と TEM

2-1 CET4 級の構成と問題概要

中国の大学統一試験のうち、専攻の如何にかかわらず全学生に課せられるのが CET4 級である。問題は全て英語で記載され、試験時間は 130 分である。大学 2 年次から受験資格があり、失敗しても繰り返し受験することができる。出題分野は Speaking を除く Writing, Listening, Reading, Translation の 4 つの分野で、内容は順に以下のようにになっている。

Part 1 の Writing (30 分間) は、120 ~ 180words で、与えられたトピックに対して意見を英語で書くものと、イラストが提示され、そのイラストを描写するもののどちらかが出題される。トピック提示型では、例えば、“about a campus activity that has benefited you most” (2014 年 12 月) のように、大学生にとって身近な話題が選ばれている。他にも “Listening is more important than talking” (2015 年 12 月) のような格言に対する意見を述べるものもある。必ず “You should state the reasons.” と自分の意見の根拠となる理由を書くことが要求される。イラスト型は、4 コマ漫画のように一続きのもの、一コマのものとがあり、どちらの場合も欧米人風の人物が何かの動作をしているイラストである。このイラストが表す状況や伝えるメッセージを 120 ~ 180words で書くようにと出題される。自分自身の意見を書くことは要求されていないが、イラストから読み取れることを論理的に述べていかなければ、得点には結びつかない。

Part2 の Listening (30 分間) は 3 つのセクションから成り、Section A と B では音声は 1 回しか流されない。Section A は短い会話 8 題と長い会話 2 題出題される。短い会話は男性と女性の一往復の会話で、細かい情報を問う質問はなく、“What does the man (/woman) mean?” や “What do we learn from the conversation?” のように、会話の筋を理解しているかどうか問われる。2 題の長い会話は 8 往復から 20 往復程度のものもある。

質問は短い会話と同種のものに加え、“What does Eric say about Maria’s father?” や “What is the woman writing about?” 等、具体的な情報を求めるものもある。Section B は短いパッセージが3つ出され、それらの内容についての質問に対し選択肢から答を選ぶ形式である。パッセージは物語風のものや新聞のコラムのような記事、大学の教科書の一部のようなもの等多岐に渡っている。長さは300words 前後で、質問内容は具体的な情報を求めるものと、話の概略から捉えられることを聞く質問の両方からなっている。Section C は問題冊子に印刷されたパッセージ中にある10のブランクに英語を書いていくディクテーション問題である。英語は3回流され、1回目は概要を捉え、2回目で記入し、3回目は確認するよう指示がある。長さは300words 前後であり、内容も Section B と類似している。

Part 3 Reading (40 分間) も同じく3つのセクションからなる。Section A はパッセージ中に設けられた10のブランクに語群から適語を選択するクローズドテストであり、トピックは「税」(2014年12月)、「海洋汚染」(2014年12月)、「現代病」(2015年12月)等が挙げられている。長さは300 words 前後で、空欄には名詞、動詞、形容詞、副詞が該当する。読解力と語彙力が問われる問題である。Section B は全体で1200～1500 words の長さのパッセージについての問題である。パッセージは10のパラグラフに分けられ、一つ一つのパラグラフの内容に合致する英文が選択肢として提示され、それらを合わせる設問である。パラグラフは短いものでは20words 程度、長くて150words 程度である。Section C は250words 程度のパラグラフ構成を持つパッセージが2題出題される。それぞれのパッセージに対する内容把握問題で、5題ずつ出題されている。Reading Part では Section A と Section C の形式は日本の英語試験問題でも馴染みのある出題形式だが、Section B のように、全てのパラグラフの要約文を選ぶ問題は日本では一般的ではない。

最後の Part 4 は Translation (30 分) で、中国語から英語への翻訳が課される。元の中国語の文章は英文に直すと100～150words 程度の長さになる。

CET4 級の難易度は井上(2002)が英検2級と比較している。英検2級は日本の高校卒業程度のレベルとされている。井上によると、必要語彙数は

英検 2 級が 5,100 語、CET4 級は 4,000 語で、英検 2 級の方が 1000 語以上多いものの、CET4 級の方が熟語などの問題は難解であること、読解問題については量が格段に多いこと、問題数・問題の種類のどちらも英検 2 級をはるかに上回ることが挙げられ、総合的に判断し、CET4 級の方が英検 2 級より難易度が高いと判断されている。

2-2 TEM4 級の構成と問題概要

TEM4 級は Dictation, Listening Comprehension, Cloze, Grammar & Vocabulary, Reading Comprehension, Writing の 6 部構成で、全体の試験時間は 135 分間である。問題は全て英語で記載されている。6 つの分野の内容は順に以下のようになっている。

Part 1 の Dictation (15 分間) は、150 words 程度のまとまりのある英文を聞き、書き取る。音声は 4 回流されるが、1 回目は内容把握のため通常の速さの音声であり、2 回目と 3 回目は書き取りのためのもので、間に 15 秒ずつのポーズが取られ、文単位、句単位で流される。最後に通常の速さで 4 回目が流された後、2 分間で最終確認をする。過去 3 年のトピックは “Male and Female Roles in Marriage” (2015 年)、“Limiting the Growth of Technology” (2014 年)、“What are dreams for?” (2013 年) となっている。

Part 2 の Listening Comprehension (20 分間) は 3 つのセクションに分かれている。どのセクションも音声の放送は一回のみである。Section A は男女 2 人の会話を聞き、3 題の設問に答えるもので 3 問出題され、計 9 題である。会話の長さは 6 往復から 20 往復程度まで幅があり、1 人の発話内にも数文含まれるものが多く、かなり多くの情報を聞くことになる。内容は大学生活やビジネス場面で想定されるものが多く取り上げられている。Section B は 200 ~ 300 words 程度のパッセージが流され、その内容に対し 3 ~ 4 題の設問がある。出題されるパッセージは 3 つで設問は計 10 題になる。2015 年に出されたトピックは「合衆国の中華街」「眠り」「喫煙」である。Section C はニュース放送を聴く問題で、BBC や VOA 等から出題される。計 5 本のニュースで、1 つのニュースに対し 1 ~ 2 題の質問があり、計 10 の設問に答える。2015 年度は外交問題、社会問題等様々なトピックから選ば

れている。いずれのセクションも出題は具体的な情報を答えるものが多く、CET4 級に多く見られた概略を問う質問は計 30 題のうち一割程度に止まっている。

Part 3 は Cloze (15 分間) で、2 パラグラフ 250words 程度のパッセージに設けられた 20 の空欄に 4 択の選択肢から適語を入れていく問題である。空欄部は CET4 級とは異なり、あらゆる品詞から偏りなく設定されている。

Part 4 の Grammar & Vocabulary (15 分間) は 30 題の出題である。短文の空所補充により、語彙、語法、文法知識を問う問題の他、“Which of the following italicized parts is used as an object complement?” や “Which of the following italicized parts indicates a predicate-object relationship?” 等、設問文中に object complement (目的格補語) や predicate-object (叙述目的格) 等の文法用語を交えた出題がある。

Part 5 は Reading Comprehension (25 分間) で、250 ~ 300words 程度の Text A から Text D まで 4 つのパッセージについて、それぞれ 5 題の内容把握問題である。読解問題の解答には、井上 (2002) によると「5 分間で 900 語の速さが要求される」ことになる。

最後の Part 6 は Writing (45 分間) あり、Section A は Composition (35 分間)、Section B は Note-Writing (10 分間) という構成である。Composition は与えられたテーマに対し、200 words 程度で 3 パラグラフのエッセイライティングを要求される。例えば、第 2 パラグラフには意見の根拠を 1 つあるいは 2 つ書くようにというふうに、それぞれのパラグラフに書く内容は細かく指示されている。それらの指示に従わないと減点され、内容、構成、語法、適切さが採点されることも明記されている。Section B の Note-Writing は 50 ~ 60 words の短い note、日本語で言う「メモ」を書く問題である。例えば友人に本を送るときに添えるメッセージ (2015 年)、会ったことのない人の外見を説明する短い文章 (2014 年)、用事で会えなくなった友人に謝罪と自分の居場所を説明するメッセージ (2013 年) 等、実際の日常生活において、書くことが想定できる実用的な問題である。採点項目は Section A と同じである。

TEM4 級の難易度について井上 (2002) を参考に、日本の英検準 1 級と

比較する。英検準1級は大学中級程度とされるレベルである。必要語彙数は英検準1級が7,500語、TEM4級が8,000語とTEMが1,500語程度上回る。その他、語彙・イディオムの問題は英検準1級に似ているが、それよりやや難解な文法・語法の問題が含まれ、中には英検1級に近いレベルの問題もあること、読解問題についてはスキミング・スキニングの問題が含まれ、5分間で900語の速読力が必要なこと、作文とリスニングはTOEFLの問題に類似していることが挙げられ、問題数・問題の種類の方ではTEM4級の方が英検準1級より圧倒的に多く、難易度は英検準1級に近い試験ということになる。

2-3 CETとTEMの特徴的側面

CET4級とTEM4級の構成と問題の概要をみてきたが、ここでは次の3点を見ることによって、これらの試験が学生にどのような英語力を求めているのかを考える。3点は順に、試験問題の内容、Speakingを除く3分野のバランス、そして合否基準についての特徴である。

まず、試験問題の内容からそれぞれの分野で注目すべき点を挙げる。Writingでは、CET4級、TEM4級ともに自分の意見を支える根拠や理由の提示および論理的な展開が求められている。英語社会では必須の「アーギュメント⁴⁾」力である。また、CETでは中国語から英語への翻訳、TEMではNote-Writingという実用性の高い様式への対応力も測られている。Listeningでは、一般学生向けのCETでは、概要を捉える問題が多く、英語専攻者向けのTEMでは詳細な情報まで問う問題が多いことが一つの特徴である。専攻別に学生にどこまで求めるかの差別化がされている。また両テストとも、内容把握の多肢選択問題以外にディクテーションを課していることは、スペリングに対する正確さも要求されることになる。読解力に関しては、第一に問題量が格段に多いことが特徴的であり、短時間に情報を採り出すスキミング力、スキニング力が求められている。パッセージ全体に対する読解問題の他に、各パラグラフの要約文を選ぶCET4級の問題は、日本では一般的ではない。これは特にスキミング力が問われる問題である。必要語彙数に関しては、難解なものもある程度は含まれるが、CET4級は英検2級より

も少ない。TEM4 級に関しては英検準 1 級より多くの語彙力が必要である。文法問題は CET4 級と TEM4 級で扱いの異なるものである。CET では純粋な文法問題は出題されないが、一方、TEM では文法用語が設問文中に登場する問題もあることから、英文法にも精通していることが解答には必要である。

まとめると、英語専攻である学生にもそうではない学生にも求められる力としては、①英語によるアーギュメント力、②短時間に大量の英文を読み取るスキミング力とスキヤニング力、③スペリング力が挙げられる。さらに英語専攻者には④高いレベルの語彙力、⑤詳細な情報を聞きとる力、⑥正確な読解力、⑦実用性の高い英文作成能力、⑧詳しい英文法の知識が求められている。このように、英語専攻者とそれ以外の学生の区分けをしている点も特徴の一つである。

求められている英語力として、共通している 3 つの力は、相応の訓練が必要になるが、CET と TEM では要求されている程度が異なる。英語専攻以外の学生対象の CET では、Reading は量こそ大量であるが、大意把握型の概要をとらえることを主に問われている。これは訳読式ではなく、英語による Reading の授業で日々繰り返されている英問英答での内容理解と同じである。また、アーギュメント型の論理構成は『英語課程基準』において、「常用の接続詞を使って順序や論理的関係を示すことができる」と、義務教育終了時 5 級の到達目標に掲げられている。Listening においても詳細な情報を読み取ったり聞き取ったりするより、むしろ概略を捉えることができるかどうかという点に重点が置かれている。英文法の知識が直接問われるようなこともない。語彙力も英検 2 級より 1,000 語以上少ない要求である。このように、一般の学生向けの CET4 級は学位取得に対し、困難すぎる課題を強いっているとは言えない。

また英語専攻者には CET とは別のさらに難度の高い試験 TEM を設けていることも、双方にとって納得を得やすい仕組みである。TEM の問題の中には難度の高い問題も含まれるが、BBC 等のニュース放送を聴くことも、メモを書くことも実際に実用度の高い技能を問うものである。

次に、Speaking を除く 3 分野が試験においてどのようなバランスで出題されているかをみる。それぞれのスキル分野がどの程度の重みを持って測られるかを見ることによって、重視されている能力がわかると考える。その手がかりに、試験の配点を用いるが、時間配分、問題内容を合わせて考慮に入れる。

Listening と Reading の配点が全体の 35% ずつを占め、Writing と Translation が 15% の配点である。Listening と Reading が重視されている印象を与えるが、Writing と Translation は合わせて「書く」という技能と捉えることができ、合計すると 30% を占める。これにより、Speaking を除く 3 技能は配点的にはバランスがほぼ取れていると解釈できる。

さらに時間配分と問題内容とも合わせ、バランスを見てみる。それぞれの試験時間は、Writing 30 分、Listening 30 分、Reading 40 分、Translation 30 分の計 120 分である。Writing と Translation という「書く」ことので分野にそれぞれ 30 分ずつ配分されている。「書く」ことは自らが発信するという「生産的 (productive) 能力」であり、長めの設定が必要になる。実際の試験問題から見ても、解答するのに決して長すぎる時間ではない。Listening は流される音声によって時間が決定するが、30 分間という試験全体の 4 分の 1 の時間が当てられている。残りの Reading は Section A から Section C まで問題の種類で 3 つあり、井上 (2002) の指摘にもあるように難解な熟語の問題が含まれていたり、量が格段に多い。配点だけで見ると、3 技能はほぼバランスが取れているが、時間配分と問題内容を合わせて見ると、Reading の負荷が高いと言わざるを得ない。

参考として、英検 2 級の一次筆記試験は CET と同じく Speaking を除く 3 技能の試験である⁵⁾。英検 2 級は全所要時間が 75 分であり、最初の 60 分間で、「語彙・熟語・文法・読解・作文」が課せられ、それらの終了後に Listening 試験が 15 分間で実施される。英検は個々の配点を公表していないので、時間配分だけで判断すると、Listening が全体の 22%、それ以外が 78% である。CET では Listening は 25% であり、英検の方が若干少なめだが、時間的にはほぼ同じ配分になっている。次に、英検の「それ以外」つまり「語彙・熟語・文法・読解・作文」の内訳は、「語彙・熟語・文法」に関する問題が

多くを占め、英文パッセージの内容把握度を測る「読解」は全体の20%にしか過ぎない。「作文」に関しては全体の10%に過ぎず、しかも与えられた語句を正しい順に直す整序問題であり、CETのように完全に個人の「生産的 (productive) 能力」を測るものではない。単純に比較することはできないが、英検2級一次筆記試験は「語彙・熟語・文法」に重点があり、CET4級は3分野がほぼ均等に割りふられていることになる。

最後に、CETとTEMの合格基準についてだが、2つ述べる。1つは、合格不合格は総合点で判定されるのではないということである。それぞれのスキル分野で分けられた4つのパート、しかもその中のさらに分類された一つ一つの項目において、一つでも合格基準点に達しない場合は不合格になるのである。例えば、CET4級は710点が満点であり、Writing、Listening、Reading、Translationの順にそれぞれの満点は106.5点、248.5点、248.5点、106.5点である。その合格点はそれぞれの60%に設定され、順に63.9点、149.1点、149.1点、63.9点となっている。ListeningとReadingはさらにSectionが2つと3つに分かれているので、そのそれぞれにおいて60%以上の正答率でなければ合格できないのである。配点が公表されているだけでなく、合格点も公表されていることから、このことは学生自身周知のことである。どの分野も偏ることなく力をつけることになる。2つ目は、合格基準がそれぞれ満点の60%で良いということである。60%の正解で合格できるということは高い合格基準点とはいえず、心理的な不安感の緩衝材として働く。

最後に補足として、2点挙げる。1点目は先に書いたとおり、これらの試験は大学2年生から受験資格があり、不合格であっても在学中に何度も受験することができるということである。もう1点は、これらの試験に対しては、各自が参考書や問題集を使って自習をするか、あるいは専門の塾に通って勉強するということである。日本ではTOEICやTOEFL等の試験対策が大学の授業で行われることが近年では、よくあるが、そのような授業は中国の大学の授業では一般に行われていない。

3. 『英語課程基準』に示された学習目標

CET と TEM という学位取得に必要な英語統一試験は小学校から始まる中国での英語教育の出口に設けられたものである。その出口に向けて、小学校から一貫したカリキュラムが構築されている。このカリキュラムが成功するには、学生側が英語を学ぶことに対し、長期間にわたって明確な意義や目標を見出し、持ち続けることが必要である。

まず、英語を学ぶことは、中国人にとって高収入を得、国際社会で成功するのに必須なスキルであるという。宮内（2005）は中国が市場経済に移行した改革開放政策以後、外国語、中でも英語ができることが金持ちになる手段であり、『英語力＝金儲け』『語学力＝経済エリート』という環境にある⁷⁾とし、英語習得が高収入をもたらすという図式が中国人の英語学習の動機付けの大きな要因であると位置付けている。同様に、尾関（2006）は「まず、世界で活躍するには英語が必要であることを生徒たちが実感していること、子どもの将来を考え、親たちが英語教育に熱心であることなどが、その背景にある。さらに中学や高校では、進学するためには、英語の成績が良いことが絶対条件であることが生徒たちのモチベーションを高めている理由である⁸⁾」としている。英語重視の考えが世代間で共有されたものであり、親子の間で、その循環が形成されている。

学習指導要領に当たる『英語課程基準』においても、その前言で英語を学ぶことは国際社会において、海外諸国と理解を深めるだけではなく、「より多くの教育の機会を与え、職業の可能性を広げることである」とし、国家としてのメリットだけではなく、個人の将来にとっても、英語を習得することが利益のあることだと示している。

そして『英語課程基準』はその目標達成に向けて、段階的に階段を登っていけるよう、小学校から高校までを9段階の「級」にわけ、それぞれの「級」で具体的な目標設定をしている。9つの「級」は順序よくゆっくり進んでいく持続的に体系的に発展する課程として設計され、その9段階の連続した「級」を昇っていく形で進行する。「級」は小学校から中学までの義務教育期間では1～5級、6級からは普通高校での目標であり、そのうち高校卒業の

基本的要求は7級、それ以上のレベルまで向上させたい高校生の目標が8級と9級となっていて、学年ごとに級が固定されているわけではない。

『英語課程基準』において注目されるのは、目的として4技能の習得やコミュニケーション能力の育成等、英語学習と直接結びつく目標のみならず、学生に有効な学習ストラテジーを身につけさせることについても目標にしていることである。この点について、小池（2013）は日本には見られない特徴として取り上げている。

（中国の）英語教育の目的は4技能の習得、コミュニケーション能力の養成、国際理解、異文化理解であり、日本と共通であるが、英語教育を通して人格・自信の養成、国家への誇りと愛国心の養成が目的に入っているところが日本と違う。また、学習ストラテジー（認知、メタ認知、コミュニケーションストラテジー、教材リソース活用ストラテジー）、意欲、態度（愛国心、協調性、学習意欲、関心等を含む）についても目標にしている⁹⁾。

国家戦略として、英語の習得が不可欠であり、それを推し進めるために、認知、メタ認知を含む学習ストラテジー、意欲、態度の領域について、「効果的な学習ストラテジーは学習の効率を高め、自主的な学習能力を向上させ、積極的な感情と態度は、主体的な学習と持続的な向上を促進させる」と明記し、重要視している。特に、学習ストラテジーは英語を有効に学習し、英語を使う様々な行動や手順に自信を持って当たれるために必要なものであるとし、学習に対して採る計画、実施、反省、評価、調整する行動、手順等について、それぞれの基準が各「級」別に具体的に示されている。そして教師は学生各自の学習ストラテジーの形成とその調整を意識的に援助する役を担う者であると位置付けている。

学習ストラテジーの具体的な基準は次のようなものである。義務教育6年生終了時に到達すべきレベルである「2級」の学習ストラテジーの目標は、「問題にぶつかった時、自主的に教員や友人にアドバイスを求める」、「簡単な英語学習の計画を作成できる」「教室における交流では、集中して聞き、積極

的に考える」等の11項目の基本ストラテジーである。義務教育の最終学年9年生（日本の中学3年）終了時に到達すべきレベルの「5級」では、「学習の中で積極的に思考し、主体的に探求し、言語の規則と運用の規則をよく発見し、一を聞いて十を知ることができる」、「実際に適合した英語の学習計画を作る」「コミュニケーションにおいて、国内外における習慣の差違に注意する」「図書館やネット上の学習テキストを初歩的な形で利用できる」などであり、認知ストラテジー、コントロール・ストラテジー、コミュニケーション・ストラテジー、テキスト・ストラテジーの4分野に分け、順に10項目、8項目、5項目、4項目の計29項目のストラテジーが挙げられている。

『英語課程基準』では「言語技能」、「言語知識」、「感情や態度」、「学習ストラテジー」及び「文化意識」の5つの方面からの目標設定であるが、「感情や態度」、「学習ストラテジー」は、どのように習得した知識や能力を基盤に、入ってくる情報を選択的に受容して、新たな知識として再構築していくかという認知面、さらにそのような認知的活動を行っている自分自身を客観的に捉えて律するというメタ認知面の涵養を求めるものであり、学習が段階的に進行していくことを助ける。つまり、自分はこうすることができるから、次でこういう情報が与えられれば、その時はこういうストラテジーを用いることで、新たな段階を達成することができるという見取り図のようなものを心に描きながら、さらに次の段階へ進んでいくことができるようになるのである。

そして、小学校から緩やかな段階を追って進行する一貫したカリキュラム構成、学校種の連携がスムーズであること、9段階の「級」別にCAN-DO方式で設定された具体的な目標が、それと作用し合い、学習を押し進め「言語技能」、「言語知識」の目標達成に効果をあげている。

高校卒業までの要求である7級から9級までを達成した者のうち、大学に進学する者は学位取得のためCETやTEMの合格を目指し、さらに英語の勉強を続ける。この段階に至っては、各自に合った学習ストラテジーが小学校から連続して蓄積されている。大学の英語の授業では、日本の多くの大学で行われているような試験対策のための授業は行われなくても、CETやTEMに向けて何をどのように勉強していけば良いのか一人一人が答えを出し、目標達成に向かって勉強するという構図である。

4. 終わりに

英語が将来の成功にとって必要不可欠と捉えている中国人には、英語学習に向けて共有された学習動機がある。そして、『英語課程基準』が国家として、中国国民の英語力向上に向け、多方面にわたる目標を9段階の級ごとに設定している。その目標は、具体的な CAN-DO で示され、1つ1つ階段を昇るようにして積み上げられていく。また、大学進学者には学位取得のため統一試験に合格するという目標が、その先にある。この長期的な目標を達成するのに、大学の授業に頼ることなく、学生は自分に合った学習ストラテジーを使用し、成果を上げている。

中国の英語教育は、第二言語としてではなく外国語として英語を学ぶ環境においては、学習動機より学習ストラテジーの方が直接的に達成度に有意に正の影響を与えるという久保（1999）の研究を具現化している¹⁰⁾。確かに中国人の間には英語学習への強い学習動機も存在するが、そこに学習ストラテジーの介入があって初めて得られた達成度である。学習動機と学習目標があり、そこをつなぐ仕組みとして、有効な学習ストラテジーを活用できるようになり、高い達成度に至るのである。

さらに、学習目標へ高い志向性がある場合、つまり「わかることが楽しい」など、新たな知識や技能の獲得が目標として想定される場合、メタ認知ストラテジーの選択にも正の影響を与えることが明らかにされている（中山2005）。1つの目標が達成され、また次の目標に向かっていくことが明確な形で提示されている中国の英語教育に当てはまる。

そして、CET や TEM への合格は長期的な目標である。しかも、その目標は無理のない目標であり、何をすれば良いのか、どのようにすれば良いのかが学生には明確になっている。そこを突破すれば、社会での成功にも近づくという見通しもある。高山（2003）は「希望や目標志向など、将来への見通しが持てる時、（略）学習を長期的なスパンで生ずるとする捉え方、自律的・充實的な学習観が導かれる」という¹¹⁾。社会での成功という学習動機に始まり、『英語課程基準』に基づいた学習目標が順次達成され、長期的目標として英語統一試験に向かう中で、中国人の英語に対する自律的・充實

的な学習観が育っていく図式が見える。

以上、CET と TEM という 2 つの英語統一試験と、『英語課程基準』から中国の英語教育を見てきた。中国は広大な国土に大勢の国民を抱える国家であり、教育も地域や経済状態の差によるところが大きい。ここで述べてきたことは、あくまでも教育環境の整った都市部に限定される話になるかもしれない。また、その中でもこれらの仕組みが機能していない場合も当然ある。今後より詳しい事例研究等が必要になるであろう。しかしそれでも、日本にとって学ぶことは大きい。英語学習において短期的な目標と長期的な目標を明確にし、学習者のメタ認知機能を活性化し、個人に合った学習ストラテジーを指導者がうまく引き出すことは日本の英語教育に、より明確な形で必要なこととして提示されるべき課題である。

謝辞

本研究は JSPS 科研費基盤研究 (C) 課題番号 26370634 「中国の英語教育に関する調査研究に基づく日本の大学英語教育再構築の試み」の助成を受けたものです。また、本論文の作成にあたり、中華人民共和国教育部制定『義務教育英語課程基準』の日本語訳では日本女子大学平石淑子教授にお世話になりました。心より感謝申し上げます。

注釈

- 1) 宮内 (2005) p.245
- 2) 大学在籍中に CET に合格しない場合、卒業はできても学位は取得できないということで、その場合、卒業後に CET に合格することで学位の取得が可能である。
- 3) CET も TEM も 2 段階の級が設定されている。CET は 4 級と 6 級で、4 級合格は全大学生に課せられ、6 級は希望者のみが受験する。英語専攻者対象の TEM は 4 級と 8 級があり、4 級は全員、8 級は希望者のみの受験である。
- 4) argument は適切な和訳がないとして、大井 (2002) では「根拠を持った主張」というくらいの意味と解説され、カタカナ書きの「アーギュメント」

- ント」が使われている。ここでは大井にならった。
- 5) 英検は従来から1級、準1級にはライティングテストが含まれていたが、2016年度第1回検定から2級にもライティングテストが加わり、2017年度からは、準2級と3級にもライティングテストが導入される。また2次試験としての英語による面接試験は従来3級以上で実施されていたが、2016年度第1回検定から4級と5級にもスピーキングテストが導入された。
 - 6) 英検2級のリスニングを除く一次筆記試験は計50問で、内訳は短文の語句空所補充25問、長文の語句空所補充10問、長文の内容一致10問、語句整序5問である。
 - 7) 宮内 (2005) p.245
 - 8) 尾関 (2006) p.23
 - 9) 小池 (2013) p.58
 - 10) 久保 (1999) p.321
 - 11) 高山 (2003) p.24 これらの学習観には、「生涯学習」(学習は生涯にわたって、生きている限り、学校を出てからも行うもの)「成長・向上」(精神的な成長や精神的な核の形成など)「主体的探求」(自主的な遂行、興味を持つことの自発的な探求など)などが含まれる。

参考文献

<論文・書籍>

- 井上裕子 2002 「大学生・大学院生対象英語検定試験——中国の場合」『北陸大学紀要』26, 159-168
- 大井恭子 2002 『「英語モード」でライティング』講談社パワー・イングリッシュ
- 尾関直子 2006 「中国の英語教育から見えてくるもの」『月刊英語教育』Vol.54 No.12
- 久保信子 1999 「大学生の英語学習における動機づけモデルの検討——学習動機、認知的評価学習行動及びパフォーマンスの関連——」『教育心理学研究』47 (4), 511-520

- 小池生夫（編著）2013『提言日本の英語教育 ガラパゴスからの脱出』光村図書出版
- 新保敦子 2011「現代中国における英語教育と教育落差」『早稲田大学大学院教育学研究紀要』21, 39-54
- 高山草二 2003「学習観とその規定要因および学習方略との関係」『島根大学教育学部紀要（人文・社会科学）』37, 19-26
- 中山晃 2005「日本人大学生の英語学習における目標志向性と学習観及び学習方略の関係のモデル化とその検討」『教育心理学研究』53（3）, 320-330
- 西蔭浩子・岡野恵・平石淑子 2015「中国の英語教育がめざすもの——小・中等教科書に見える中国文化——」『大正大学研究紀要』第101号, 253-262
- 宮内敦夫 2005「中国における英語教育の現状——日本の英語教育を再考するために——」『国際地域学研究』第8号, 243-262

<中国オリジナル資料>

- 中華人民共和国教育部制定（2011年版）『義務教育英語課程基準』
- College English Test 4（2013年12月～2015年6月）群言出版社
- Test For English Majors 4（2008年～2015年）浙江教育出版社